

# 「第1回乳幼児の父親についての調査」 結果の特徴について

東京大学大学院教育学研究科教授 汐見 稔幸

## 1. 父親を対象とした調査について

日本の父親は、家庭を自分の一番の居場所とし、そこに家族の他のメンバーと協力してできるだけ楽しく豊かな文化を創造するという生き方を選択することがなかなかできない状態が長く続いてきました。このことは各国の父親の姿と比較すると一目瞭然で、たとえば東洋大学の社会学者グループが行った調査では、「あなたのお父さんはあなたによく相談しますか」という主旨の質問に、「いつもそうだ」「かなりそうだ」と答えた中高生の割合は、アメリカが58%で中国やトルコが46%程度であったのに対し、日本はたったの2.8%でした。10年ほど前の調査です。日本の父親は、成長して中学生や高校生になった自分の娘や息子にあれこれ相談するような生活をほとんどしていないというのです。これは、相談する姿勢を持たないというよりも、普段から家族であれこれ一緒に何かをする、楽しむという生活が日本の父親には十分保障されていないということの反映だと考えられます。ローンを抱え、教育費を稼がねばならず、自分のリストラ不安と戦わなければならない30～40歳代の日本の父親には、家族とのゆったりとした時間などは幻想に近かったのです。

今回の調査は、この調査が行われてから10年ほどたち、しかも、上記調査と異なり乳幼児の父親が対象です。世代として20年くらいの違いがある父親です。調査は、この子育て真っ最中の最も新しい世代である父親の実態と、そこに表れている変化を、これまでの調査よりも多角度から、丹念に探る目的で行われました。おそらく、こうした規模での父親調査はこれが初めてではないかと思われます。対象者が首都圏のインターネットを常用している男性という限定があるので、これが日本の父親の全体像です、とはすぐにはいかないのですが、それでも、日本の父親の実態の一端は十分にうかがえる結果が出たと考えますし、その数値の後ろには現代日本の父親のさまざまな想いがにじんでいるように思います。

## 2. 調査結果の概要

結果の概要は以下のとおりです。

まず、父親が、自分の子ども（乳幼児）とどれほどの時間かかわっているかということですが、平日では、「1～2時間未満」という父親が一番多く、次が「30分～1時間未満」という結果で、1日に2時間以内という親が全体のほぼ3分の2を占めました。

少し前までの父親に比べると平日にかかわっている時間は伸びていると思われませんが、そ

れでも子どもの年齢を考えると、接している時間が1日2時間以内というのはやはり少ないといえるでしょう。朝出勤する前に子どもと少し遊び、帰ってから絵本を読んでやったり、お風呂に入れてやったり……ということをするれば、すぐに3時間以上にはなると思いますが、そういう父親は全体で2割もいませんでした。以前の標準からすれば、それでもよくかわるようになったと評価できるかもしれませんが、世界を基準にとると、やはり日本の父親はまだ育児や家事、総じて家庭参加が遅れていると言わざるを得ないのかもしれませんが。その点は父親自身も自覚しているようで、平日、本当はこのくらいはかかわりたいという時間は2時間以上が70%を占めました。あと1時間は毎日わが子とかかわりたいというのが日本の父親の素直な気持ちなのでしょう。毎日2時間以上かかわることができないでいる最大の理由は帰宅時刻の遅さであること、特に夜7時までに帰れないことにあることは、調査の結果ははっきりと出ていますので、今後育児世代の父親の帰宅時刻の早期化は、重要な社会的課題になるでしょう。勤務時間を朝型に切り替え、出勤時間をずらすということも考えられます。

わが子とのかかわり方の質ですが、調査の結果では、「自分は子どもに必要とされている」という自覚を持っている父親が「とてもそう思う」「まあそう思う」合わせて9割を超えたこと、また「自分は子どもの相手をよくしている」と自己評価している父親も「とてもそう思う」「まあそう思う」合わせて70%を超えました。これは、父親としての自己評価がかなり高いことを表していますが、この結果は私たちにはやや意外でした。今みたように、平日のかかわりの時間については父親たちは少し不満を感じているわけですから、そのかかわりの内容や質についても不満を持っているのかなど考えたのですが、結果は逆で、自己評価はかなり高いのです。そのことは、立ち会い出産の経験者がほぼ50%になっていたという数値とも関係していると考えられます。これも予想以上の高さでした。

父親のかかわりへの評価（自己評価）の高さは、連れ合いである妻も同じように感じているのかどうか、今回は確かめられませんでした。示唆するデータはあります。父親がよくしている家事・育児の項目の中で子どもを叱ったりほめたりするとかお風呂に入れるという要目は高いのですが、掃除をする、食事を作る、子どもと外で遊ぶなどという項目は極端に低くなっていました。子どもと外で遊ぶことが苦手という母親は多く、その点を父親に期待しているはずですが、そこが低いということは、たとえこのデータが平日の生活についてのものであるとしても、母親の期待とは多少ずれている可能性があります。

が、ともかく父親の自己評価が高かったということは、毎日もう少し長い時間かかわりたいという気持ちを多くの父親が持っているという結果に表れているように、今の制限内では精いっぱいかわっている、したがってそのかかわり方そのものに不満はない、という自覚を持った父親が多くなっていることを表しているのでしょう。そう考えれば、この評価の高さは、父親の育児参加の質的な転換を示唆している可能性があるということになるわけですから、今後、もう少ししていねいに探られるべきだということになります。

父親自身の子育て観には現代の父親世代の特徴がよくでていえます。育児について力を入れて育てたいと思っている項目の中で最も多かったのが「他者への思いやりを持つこと」で、将来どういう人間になってほしいかという質問にも「友人を大切にする人」や「自分の家族を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」という項目がぬきんでいたのでした。

日本の文脈でみれば特に珍しいことではないかもしれませんが、これを諸外国と比較して

みると、きっとおもしろい結果が出ると思われます。以前の東京大学とシカゴ大学が行った日米の比較調査などでは、アメリカの親のしつけ期待項目で多かったのが「自己主張のできる人間になること」や「リーダーシップを取れる子になってほしいこと」ということで、その違いが歴然と浮かび上がっていたのです。日本では、こうした項目はかなり低く、やはり「他人に迷惑をかけない子」などが上位に出てくる結果でした。

今回の父親調査でも、子どもに期待するもののトップに来たのがほとんど対人関係をスムーズに進めるための人間性で、このことは、裏を返せば、父親自身の人生訓が対人関係のスムーズさということににじみ出ていると読むことができます。競争社会に生きざるを得ない父親が、わが子になによりも望むのが「他者への思いやり」であるということに、深い葛藤を読むことが可能だと思われます。

父親のわが子への期待のなかに「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」という項目を入れて調べてみたのですが、これは「とても力を入れたいと思う」と答えた父親が2割弱でした。これは低いとも読めますが、私としては、高いと読んでもいいのではないかと思います。これまでの日本では、学力を高くつけさせたいという要望は当然でしたが、芸術的な才能をという親はそれほど高くなかったのではないかと予想されるからです。21世紀は20世紀とちがって、芸術的なセンスがかなり重要な社会的価値を占める可能性があるかと私などは考えますが、そうした方向に価値観をシフトし始めていることが示唆されたデータではなかったかと思うのです。「外国語を学ぶこと」というのも2割弱でしたが、今後こうした項目の数値が増えていくのではないかとされていて、継続調査がほしいところです。

細かな点については、本報告書をよくお読みいただければと思います。

はじめのほうでも申し上げましたが、父親についてのこうした体系的な調査はまだあまりありません。今回の調査を今後定点観測的に続けることがたいへん重要な意味を持つと思われますし、同時に諸外国と協力して、日本の父親の特徴を浮かび上がらせることも大切な課題になると思います。おそらく、そうした比較調査は、父親の特徴だけでなく、父親が属している日本の社会、特に企業社会の特質を別の角度から明らかにする可能性があると考えられます。その意味で、次世代育成が課題になっている日本の社会の分析に、大いに貢献する調査になるだろうということが予測されるわけで、関係各者に今後ともご協力をお願いしたいと思っています。